

# ローカルメディアカ 山福印刷 福岡県北九州市

## 小さな印刷所のおやじが遺した 地元根差した印刷物の数々

北九州の港町・若松区で小さな印刷所を営んだ山福康政。地元のさまざまな印刷物を作りながら、出版活動を行い、絵草紙を描いた。その「仕事」をまとめた展示と、そこから生まれた冊子を紹介しよう。



山福が描いた地元の店のマッチラベル。昔の若松の繁華街の雰囲気が伝わる。当時、マッチは有効な広告媒体として配布された。

1963年(昭和38)、5つの市の合併によって生まれた北九州市。区ごとにそれぞれ雰囲気異なるが、なかでも若松区は独特だ。筑豊の炭鉱で掘り出された石炭を積みだす港湾都市として発達し、よそ者を受け入れる懐の広さと開明的なモダンズムが同居していた。

1963年(昭和38)、5つの市の合併によって生まれた北九州市。区ごとにそれぞれ雰囲気異なるが、なかでも若松区は独特だ。筑豊の炭鉱で掘り出された石炭を積みだす港湾都市として発達し、よそ者を受け入れる懐の広さと開明的なモダンズムが同居していた。

山福康政は1958年に広島で生まれ、2歳で若松に移住。20代でガリ版(謄写版)印刷の仕事をはじめた。山福印刷など複数の社名があったが、夫婦を中心に営む自宅兼の小さな印刷所だった。

の店の広告ハガキ、マッチラベル、イベントのポスター、同人誌の表紙などが展示されている。ガリ版とシルクスクリーンを併用し、凝った絵柄のものが多い。受注した仕事だが、本人には作品だという意識が強かったのではないかと。依頼者から漠然としたイメージを聞いて、それに合う画風で

描いていましたが、すべてお任せで頼まれたときのほうが、絵もデザインも優れていると思います。この展示を企画した、山福の長女で木版画家の山福朱実さんは言う。

会。のち草風館より再刊)。その後も新聞や雑誌に連載し、一部は『風の道づれ』に収録された。当時の町の雰囲気やそこに住む人の貴重な記録である。「すこおれくて生きることが性にあっていいる」山福は、「もうからんこと大好き」と笑って、好きなことをやり続けた。それを苦勞して支えたのが、妻の緑さんだった。そして、山福の死後は長男の康生さんが山福印刷を継ぎ、絵の仕事は朱実さんが受け継いでいる。



1 古書店「若松書房」の古書目録やカレンダー。2 小倉で開催の山福朱実さんと南陀楼のトークイベントに康生さん(右)も参加。3 旧古河鉱業若松ビル。4 『山福康政の仕事』裏山書房発行 2,000円(税込)。問い合わせ先はTEL/FAX 093-761-3870



若松に戻って暮らしはじめたことが、展示のきっかけだった。今年が山福の生誕90年、没後20年にあたることは、人から言われて気づいたという暢気さが、いかにもこの一家らしい。展示からしばらく経って刊行された『山福康政の仕事』には、多くの図版が掲載されるとともに、山福と親交のあった人たちが寄稿していて、読みごたえがある。この展示は来年、東京でも開催される予定だという。(南陀楼綾繁)